

イザヤ書30-32章 「まことの安らぎ」

1A 神の助言に対する反逆 30

1B 頼りにならないエジプト 1-17

2B 教師たる主 18-26

3B 戦われる主 27-33

2A 人間の力に頼り頼む反逆 31

3A 正義による統治 32

1B 痴れ者 1-8

2B 呑気な女 9-20

本文

イザヤ書 30 章から読んでいきます。28 章から、主は、「ああ」という言葉、つまり「災いだ」という言葉でユダの中にある霊的問題にメスを入れておられます。そこには、「エジプトとの軍事同盟」がありました。彼らが、表向きは信仰を持っているとしながら、実はこの世の知恵と力に頼っていることについて、主は明らかにされました。そして、彼らに覆っていた問題を指摘されます。それは、イザヤの語る神の言葉が、世のものに頼っていたために覆いがかかって、それを悟ることができなくなっていたことです。聖霊によって、心に刺さる言葉ではなく、口では神を敬っているが、心が遠く離れているという問題を語られました。

そして 30 章に入ります。30 章も同じく、「ああ」という言葉から始まります。続けて、エジプトとの軍事同盟に走るユダに対して主が叱責されます。

1A 神の助言に対する反逆 30

1B 頼りにならないエジプト 1-17

30:1 「ああ。反逆の子ら。…主の御告げ。…彼らははかりごとをめぐらすが、わたしによらず、同盟を結ぶが、わたしの霊によらず、罪に罪を増し加えるばかりだ。

ユダの民について、「反逆の子ら」と呼んでいます。私たちが神に反逆すると言えば、神に悪態をつくとか、嘘をつくとか、道徳的なことを考えると思います。けれども、ここではそういうことではありません。神によるはかりごとを思いめぐらさないこと、神の御霊によらないこと、これ自体が神に反逆しているということです。御霊に拠らないということは、それは肉のことです。自分が自然にこうあるべきだと思いつくこと、その気持ちや思いによって動く時、それは神に反逆していることになります。ですから、ここで彼らが反逆しているのは、実は自分は正しいと持っていることばかりです。だからこそ、自分が主に反逆していると分からないのです。「ローマ 8:7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」

そして、「はかりごと」とありますが、これが計画を立てること、思い計ることを意味します。イエス様は、「不思議な助言者」と呼ばれましたが、「助言」と訳してもよいでしょう。英語ですと、counsel つまり「カウンセリング」です。カウンセリングの時に必ず起こる問題は、相談する人が自分のしたいことを是認してほしいので相談するということです。そのしたいことが間違っているという言葉は聞きたくありません。しかし、それは本当の意味でのカウンセリングではありませんね。自分のしていることを横において、何が知恵あることなのかを謙虚に聞くことが大切です。そのことを主に対して行なわなければいけません。「箴言 8:14 計りごとと、確かな知恵とは、わたしにある、わたしには悟りがあり、わたしには力がある。(口語訳)」御言葉をこのように聞いていくことは、まさに主ご自身によって、その御霊によってカウンセリングを受けているようなものです。

30:2 彼らはエジプトに下って行こうとするが、わたしの指示をあおごうとしない。パロの保護のもとに身を避け、エジプトの陰に隠れようとする。30:3 しかし、パロの保護にたよることは、あなたがたの恥をもたらし、エジプトの陰に身を隠すことは、侮辱をもたらす。30:4 その首長たちがツォアンにいても、その使者たちがハネスに着いても、30:5 彼らはみな、自分たちの役に立たない民のため、はずかしめられる。その民は彼らの助けとならず、役にも立たない。かえって、恥となり、そしりとなる。」

「陰」というのは「保護」というのと同じです。つまり、ユダの人々は、自分の安全保障をエジプトに求めたということです。アッシリヤの脅威に対して、その恐れと不安を目に見えるものの保護に頼ろうとしました。「ツォアン」は、エジプトの北部にある町で学問に優れたところとして有名でした。だから、そこに行けばアッシリヤに対抗できる知恵が得られると思って、彼らは使者をそこに送ったのです。私たちの周りにも、たくさんの「知恵」と呼ばれているものがあります。もちろん、それらに耳を閉ざしてはいけません。耳は傾けるべきです。しかし、最終的に何が正しく良いことなのかを知るのは、主を恐れることによるのみ、神のご計画を聞くことによるのみ判断できるものです。私たちの周りにも、自分の理解を超えてしまっている事柄が起こっています。その時に、自分の悟りに頼らず、心を尽くして主に拠り頼むことができるのか、これが試されています。

そして、安直な世の知恵に頼ることは大きな対価を支払うことになります。役に立たない、ということ。そして恥となります。聖書の「恥」というのは、恥ずかしいというよりも、「期待通りにならなくて失望する」という意味合いが強いです。「私は福音を恥とは思いません。(ローマ 1:16)」とパウロは言いましたが、それは「裏切られない」という意味合いが強いです。それに賭ける、それに頼っても、失望するようなものではない、という意味です。

30:6 ネゲブの獣に対する宣告。「苦難と苦悩の地を通り、雌獅子や雄獅子、まむしや飛びかける蛇のいる所を通り、彼らはその財宝をろばの背に載せ、宝物をらくだのこぶに載せて、役にも立たない民のところへ運ぶ。30:7 そのエジプトの助けはむなしく、うつろ。だから、わたしはこれを『何もしないラハブ』と呼んでいる。」

ユダの民がエジプトに下る時に、ネゲブという荒野を通ることになります。そして、ここに書かれている描写は、こんなに苦勞して、危険を冒していても、そして高価な代金を支払ったとしても、それでも助けは来ない、ということです。「ラハブ」というのは、エジプトの別名であり、また海の巨獣の名前でもありました。エジプトはその見た目のように豊かで、知恵があり、強い国のように見えるけれども、綿飴のように、何も無いのだということです。私たちの周りにも、苦勞とお金ばかりかかるけれども、何ら達成しない知恵というものが沢山あります。

30:8 今、行って、これを彼らの前で板に書き、書物にこれを書きしるし、後の日のためとせよ。代々限りなく。30:9 彼らは反逆の民、うそつきの子ら、主のおしえを聞こうとしない子らだから。30:10 彼らは予見者に「見るな。」と言ひ、先見者にはこう言う。「私たちに正しいことを預言するな。私たちの気に入ることを語り、偽りの預言をせよ。30:11 道から離れ、小道からそれ、私たちの前からイスラエルの聖なる方を消せ。」

主がなぜここで、「書物にこれを書きしるし」なさいと言っているかということ、彼らが忘れるからです。「えっ？そんなこと聞きましたっけ？」と彼らは嘯きます。都合の悪いことは、私たちは忘れたとして嘯いてしまいます。そして、私たちが主の御心、正しいことを聞くのではなく、自分に都合の良いこと、道が外れていてもよい、とにかく正しいことを語ってくれるな、と思っています。それは本質的に、聖なる主を消してくれと言っているのと同じです。同じことが、終わりの日に起こることをパウロはテモテに教えました。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」

30:12 それゆえ、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「あなたがたはわたしの言うことをないがしろにし、しいたげと悪巧みに抛り頼み、これにたよった。30:13 それゆえ、このあなたがたの不義は、そそり立つ城壁に広がって今にもそれを倒す裂け目のようになる。それは、にわかに、急に、破滅をもたらす。30:14 その破滅は、陶器師のつぼが容赦なく打ち砕かれるときのような破滅。その破片で、炉から火を集め、水ためから水を汲むほどのかけらさえ見いだされない。」

エジプトに頼ったために、そこには余計な勞力と金銭が必要でした。結局しわ寄せがやって来て、住民に重税を課したり、何かを偽ってエジプトとの同盟を締結させようとしているのです。それが、「しいたげと悪巧み」です。私たちも初めから何か悪いことをするわけではありません、けれども御靈に抛らないで肉に頼るときに、どこかで無理がきて目的を達成させるために手段を選ばなくなってしまう。すると、一気に落ちてしまいます。ここにあるそびえ立つ城壁、また陶器師が打ち砕く破片のようになると言います。キリスト教の団体の中でも、組織が大きくなって、その運営のために内部で不正が行われるということが実際に起こります。そうすると、せっかくこれまで築いた評判がその一つの事件で一気に落ちてしまうのです。

30:15 神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。

エジプトとの同盟、エジプトの助けを借りていく時の彼らの思いは、「恐れ」と「焦り」です。自分で何とかしなければやっていけないと思って、恐れ、焦っているのです。このように、「自分で何とかする」ということが、元凶であります。そこでしなければいけないことは、「立ち返る」ことです。言い換えれば、悔い改めることですが、はっきりと思いを変える必要があります。心が向くその流れに乗っていくのではなく、半ば強制的にでも、今、していることを止めるのです。それが、「静かにする」ということです。私たちが、自分たちが何かをしている、ではなくて、主が何をしておられるのか、主が救いの働きをしておられるのだ、ということを静かにすることによって見えてきます。そして、落ち着いて信頼することによって、初めて力が与えられます。これを何とか自分たちでやっていこうとすると、その慌てている心は疲れてきます。

30:16 あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。30:17 ひとりのおどしによって千人が逃げ、五人のおどしによってあなたがたが逃げ、ついに、山の頂の旗ざお、丘の上の旗ぐらいしか残るまい。

恐れに対して、何かをすることによって対抗しようとするこのような結果になります。恐れていることが、本当にそうになってしまいます。そして、恐れというのは増幅します。実体以上の大きなものに見せてしまいます。イスラエルの民がカデシュ・バルネアにて、カナン地の先住民が恐ろしい巨人であると、それを見たイスラエル人の十人が言いふらしましたね、それは誇張でした。

2B 教師たる主 18-26

30:18 それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。

これが 30 章の鍵になる主の言葉で、午前礼拝の箇所でした。私たちが自分で何かをしなければいけないとあせっている時、主は待っておられます。そして、私たちは自分ではどうしようもなくなった時に、ようやく主はご自分の救いの働きを始めることができます。私たちは、主が行なわれる救いをじっくりと待つ者たちです。そして主が救われるところに留まって、主がなされることを目撃していくように召されています。そしてここに、「正義の神」とあります。主こそ、正しい方です。私たちが自分を正しいとするのではなく、主が正しいとする時に何かが起こります。

30:19 ああ、シオンの民、エルサレムに住む者。もうあなたは泣くことはない。あなたの叫び声に
応じて、主は必ずあなたに恵み、それを聞かれるとすぐ、あなたに答えてくださる。30:20 たとい主

があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜わっても、あなたの教師はもう隠れることなく、あなたの目はあなたの教師を見続けよう。30:21 あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

すばらしい、すばらしい恵みです。「シオンの民、エルサレムに住む者。」と主は呼ばれています。が、これは言い換えれば、「わたしが生きている中に住んでいる者よ」ということでしょう。主がおられるところに留まっている者、ということです。そして、この恵みは一つに、自分の叫びに主が答えてくださるというものです。イエス様も約束されました。「ヨハネ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」そして、「教師が離れることがない」と言っています。これは紛れもなく主ご自身であり、御霊ご自身です。「ヨハネ 16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くまを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」乏しいパンとわずかな水であっても、それでも助けてくださる方であります。

30:22 あなたは、銀をかぶせた刻んだ像と、金をかぶせた鑄物の像を汚し、汚れた物としてそれをまき散らし、これに「出て行け。」と言うであろう。

主に祈りが聞かれ、また主がどこに行っても教えてくださる方、いつもおられる方であることを経験すれば、ここにあるように自分の中にある偶像を自ら捨て去ります。偶像というのは、私たちが主なる神ではなく自分の力や知恵に拠り頼んでいる時に、必ず心に持っているものです。主が命じられていることよりも、「私はこれを持っていますから」と言って、平然とその命令に従わないのが、偶像がすることです。ですから、私たちは心にたくさんに偶像を知らないうちに持っています。

30:23 主は、あなたが畑に蒔く種に雨を降らせ、その土地の産する食物は豊かで滋養がある。その日、あなたの家畜の群れは、広々とした牧場で草をはみ、30:24 畑を耕す牛やろばは、シャベルや熊手でふるい分けられた味の良いまぐさを食べる。30:25 大いなる虐殺の日、やぐらの倒れる日に、すべての高い山、すべてのそびえる丘の上にも、水の流れる運河ができる。30:26 主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日に、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍になって、七つの日の光のようになる。

神の国が訪れる日のことです。主が御霊によってユダの民を贖われたら、今度は被造物にも贖いを与えられます。「ローマ 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」この農耕の豊かさにしても、水の流れる運河にしても、そして七倍に光る月や太陽にしても、それが、彼らがこれまで受けてきた傷、自分たちの不従順によって受けた傷を癒して余りあるものとなっています。主は、このような働きを行ってください。確かに罪を犯せばそれが傷となります。しかし、主はその罪を赦し、癒し、そしてあまりある恵みを降り注

いくださるのです。

ところで、この中に 25 節、「大いなる虐殺の日、やぐらの倒れる日」とあります。これは、神の国がキリストの再臨によって到来する時に、その反対する勢力に対して主が戦ってくださることです。神の国が徹底的に神に反抗する肉の国、人間の国に攻め入ってくる訳です。その戦いの勝利によって、初めてこのような至福の国が訪れるということです。私たちは、このような神の国にある「攻め」の要素を知らないといけません。自分の信仰が守られるだけでは不十分です。自分の信仰は主が与えてくださり、主が守ってくださいます。そこから、今度は人々を福音をもって愛していくという攻めに入るのです。イエス様がそのような方でした。このお暗き世に光として来られました。人々が普通、行かないような領域に入られました。また人々が取り扱わないような、心の闇を明らかにされました。キリストの愛によって攻め入るのです。

3B 戦われる主 27-33

この「主が戦われる」ことを前面に出して預言しているのが、27 節から最後までです。

30:27 見よ。主の御名が遠くから来る。その怒りは燃え、その燃え上がることはものすごく、くちびるは憤りで満ち、舌は焼き尽くす火のようだ。30:28 その息は、ほとばしって、首に達するあふれる流れのようだ。破滅のふるいで国々をふるい、迷い出させる手綱を、国々の民のあごにかけろ。30:29 あなたがたは、祭りを祝う夜のように歌い、主の山、イスラエルの岩に行くために、笛に合わせて進む者のように心楽しむ。30:30 しかし、主は威厳のある御声を聞かせ、激しい怒りと、焼き尽くす火の炎と、大雨と、あらしと、雹の石をもって、御腕の下るのを示される。

主が天から勢いよく来られる姿です。口から、その息から怒りが現れることが書かれていますが、黙示録 19 章には、主が口から鋭い剣をもって諸国の軍隊をことごとく滅ぼされることが書かれています。そしてここで、同時にユダの民が喜んで、笛を奏でて主に歌い喜んでいることが書かれている部分を見てください。主をほめたたえながら、そこには主が悪の勢力に対して戦ってくださっているということが分かります。黙示録において、地上に災いが下ると同時に天においては、大いなる神への賛美が繰り広げられています。そして主が来臨される時に、それが頂点に達します。「2 テサロニケ 1:9-10 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の・・・そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。・・・感嘆の的となられます。」

30:31 主の御声を聞いてアッシリヤはおののく。主が杖でこれを打たれるからだ。30:32 主がこれに下す懲らしめのむちのしなうごとに、タンバリンと立琴が鳴らされる。主は武器を振り動かして、これと戦う。30:33 すでにトフェテも整えられ、特に王のために備えられているからだ。それは深く、広くされてあり、そこには火とたきぎとが多く積んである。主の息は硫黄の流れのように、それを燃

やす。

主が終わりの日に行われることを、前兆のようにして、予型のようにして、今、差し迫っているアッシリヤに対しても行なわれます。エルサレムを取り囲むアッシリヤ軍を主はたちまち滅ぼされます。そして王も滅ぼされます。アッシリヤについては、セナケリブが何年も後に息子に殺されるので、ここに書かれているようにはなりません。トフェテというのは、ヒノムの谷のことで、そこにごみの焼却がなされ、偶像礼拝の時にはそこで子供が火の中を通らされていました。イエス様はそこを「ゲヘナ」と呼ばれました。それから、死後に神の審判の後に投げ込まれる所が、ゲヘナと呼ばれるようになります。主がアッシリヤの王に対して行なわれるように、終わりの日には反キリストに対して主が戦われて、そして反キリストは火と硫黄の池に投げ込まれます。

私たちは、絶大な力をもっている悪魔、そして後に人としてその力を帯びる反キリストについて、彼らが滅びるのだという信仰を持って生きていく必要がありますね。悪魔は全能ではないのです、彼はむしろ、全能なる神の前で滅びる存在なのです。

2A 人間の力に拠り頼む反逆 31

31:1 ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。31:2 しかし主は、知恵ある方、わざわいをもたらし、みことばを取り消さない。主は、悪を行なう者の家と、不法を行なう者を助ける者とを攻めたてられる。31:3 エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も、肉であって霊ではない。主が御手を伸ばすと、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れて、みな共に滅び果てる。

31 章も 30 章の初めと同じように、「ああ」という言葉から始まっています。30 章では、彼らがエジプトにある知恵に期待していた部分を主が取り扱っておられましたが、31 章ではここにあるように馬や戦車に頼る、つまり肉の力、目に見える力に頼る部分を取り扱っています。ここは、絶えず旧約聖書から新約聖書に至るまで貫かれている主題です。ヨシヤたちが、わずかな人数でカナンの王たちを倒しました。そこにある数ある戦いは、主ご自身が戦ってくださっていることを物語っています。「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。(詩篇 20:7)」

私たちは、目に見える力は肉眼で見えるので、それに力があって、目に見えないところに目を留めるのは意識しないとできません。目に見えないのですが、実質はそちらにあるというのは、物理的な世界にもたくさんあります。無線や電波はまさにそれです。霊においては、なおさらのことです。ダニエル書 10 章には、ペルシヤの君、ギリシヤの君という存在が出てきます。ペルシヤ帝国、ギリシヤ帝国の背後に、墮落した天使が支配している力があつたということです。それだけ、霊的な勢力は強いということです。したがって、私たちが肉の武器に頼らずに、霊の武器に頼るよ

うに、何度も何度も言われていることなのです。「2コリント 10:4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」

31:4 まことに主は、私にこう仰せられる。「獅子、あるいは若獅子が獲物に向かってほえるとき、牧者がみなそのところに集められても、それは、彼らの声に脅かされず、彼らの騒ぎにも動じない。そのように、万軍の主は下って来て、シオンの山とその丘を攻める。31:5 万軍の主は飛びかける鳥のように、エルサレムを守り、これを守って救い出し、これを助けて解放する。」

主が、アッシリヤを攻められる時をどのように行なわれるかを分かり易く描写しています。一夜にして 18 万 5 千人を滅ぼされるのですが、そのことを飛びかける鳥のように語られています。そして、世の終わりの時にも同じように、エルサレムを攻めてくる世界中の軍隊に対して、主は子の町を守ってくださいます。ナルニア国の物語に、一作目「ライオンと魔女」があります。最後の戦いでは、まさにこれでした。キリストを表すライオンが、魔女に対して速やかに襲い掛かります。それで戦いが終わります。救い出し、人々を解放するのです。

31:6 イスラエルの子らよ。あなたがたが反逆を深めているその方のもとに帰れ。31:7 その日、イスラエルの子らは、おのこの自分のために自分の手で造って罪を犯した銀の偽りの神々や金の偽りの神々を退けるからだ。

再び悔い改めの呼びかけをしておられます。ここでは、「帰れ」という言葉を使っておられます。反逆によって遠く離れてしまったその心を主のもとに帰るようにせよということです。そして、再び偶像を捨てることを話していますが、偶像のもう一つの特徴は「目に見える」ということです。私たちが拠り頼んでいるもの、それらは目に見えるものです。物理的なものでなくとも、例えば人からの評価というのも含められます。

もう一度言いますが、偶像とは自分のためにあるものです。ここに、「おのこの自分のために」と書いてあります。それ自体で悪いものもありますが、実は良いものがたくさんあります。それを神よりも大事にしようとする時、それが偶像となります。そしてなぜ神よりも大事にするかというと、自分のためだからです。偶像礼拝とは基本的に自分を拝んでいること、自分礼拝です。

31:8 アッシリヤは人間のものではない剣に倒れ、人間のものではない剣が彼らを食い尽くす。アッシリヤは剣の前から逃げ、若い男たちは苦役につく。31:9 岩も恐れのために過ぎ去り、首長たちも旗を捨てておののき逃げる。…シオンに火を持ち、エルサレムにかまどを持つ主の御告げ。…

31 章はこのように、「人間ではない剣に倒れ」ということが強調されていることです。人間の力、目に見えるものではなく、目に見えない御霊の力です。それによって、アッシリヤは必ず滅びるという約束です。そして、「シオンに火を持ち、エルサレムにかまどを持つ主」とあります。これは主の

おられるところには、燃え尽くす火があるということでもあります。実にヘブル書 12 章 29 節には、「私たちの神は焼き尽くす火です。」とあります。

3A 正義による統治 32

そして主は、これら反対する勢力を滅びし尽くした後の、ご自身の統治の幻をイザヤにお見せになります。

1B 痴れ者 1-8

32:1 見よ。ひとりの王が正義によって治め、首長たちは公義によってつかさどる。

「見よ」という言葉から始まっています。注意喚起していますが、それは「ひとりの王」を見つめてほしいからです。この王が世界を正義によって治めている幻です。イザヤはこれを、33 章に入っても続けて見ており、33 章 17 節において「あなたの目は、美しい王を見、遠く広がった国を見る。」と言っています。この「美しい王」の前には定冠詞がついており、「あなたの目は、この美しい王を見て」と言っています。そして、この方こそ、33 章 22 節で「まことに、主はさばく方」と言って、ヤハウエなる神、主であること明言しているのです。

アッシリヤの時代におけるヒゼキヤ王のことではなく、究極に救いをもたらすヤハウエなる神、主ご自身が地上を正義で治める幻がここに書かれています。イザヤは、このことを信仰の目でしっかりと見て、それで希望を抱いているのです。私たちがそうしたいですね。どんな暗き世においても、必ず神が征服してくださる。そして、正義をこの世界に満たしてくださることを信じるのです。

ひとりの王が正義によって治めるだけでなく、「首長たちは公義によってつかさどる。」とあります。主なる神、イエス・キリストが正義によって治めてくださいます。「正義」というのは、元々の意味は「まっすぐ」ということです。これは高い道德の基準というよりも、人が神に信頼して、この方に聞いて、この方の中に生きる、その人格的な関係の正しさを意味しています。神殿の中で祈っていた、パリサイ人が、自分がどれだけ献金をして、断食をしていたかというような、自分の正しさを神にぶつけていくような正義ではありません。そして、首長たちの「公義」というのは、神との正しい関係を他の人々にも具体的に押し広げていくことを意味しています。神が自分の罪を赦した憐れみ深い方であれば、自分も他の人々に対して優しくして、憐れみ深くなることです。

神の国においては、王なる主イエス・キリストがおられて、そして首長たる、神の統治を任された者たちがいます。使徒に対して主は、「世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたにも十二の座について、イスラエルの十二の部族をさばくのです。(マタイ 19:28)」と言われました。そして回復したイスラエルの民も、諸国の民を支配するようになることがイザヤ書 14 章 1-2 節にあります。そして教会がキリストとともに統治することは、何度も約束として啓示されています。「私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった…

(黙示 1:6)「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。(ローマ 8:17)」

32:2 彼らはみな、風を避ける避け所、あらしを避ける隠れ場のようになり、砂漠にある水の流れ、かわききった地にある大きな岩の陰のようになる。

これは、正義と公義によって治めているので、その中にいる者たちに平和があり、守られて安心しているということです。これまで外敵や天災による苛酷さはなくなり、慰められ、守られていることを意味しています。いかがでしょうか、全ての人が正直であれば、私たちは警戒する必要がありません。全ての人が貪欲でなければ、虐げられる人はいなくなります。愛をもって他者に接していれば、困る人、悩む人はいなくなります。

32:3 見る者は目を堅く閉ざさず、聞く者は耳を傾ける。32:4 気短な者の心も知識を悟り、どもりの舌も、はっきりと早口で語るができる。

30 章にありましたが、主が彼らの叫びを聞いてくださって、助けてくださいます。また、教師が隣におられて、右に行くにも左に行くにも、どうすればよいかを教えてください。語ることにしても、聞くことにしても、自由になるというのです。また、心も落ち着いているので、何かをしなればいけないと拙速にならず、知識を悟るのです。

32:5 もはや、しれ者が高貴な人と呼ばれることがなく、ならず者が上流の人と言われることもない。32:6 なぜなら、しれ者は恥ずべきことを語り、その心は不法をたくらんで、神を敬わず、主に向かって迷いごとを語り、飢えている者を飢えさせ、渴いている者に飲み物を飲ませないからだ。32:7 ならず者、そのやり方は悪い。彼はみだらなことをたくらみ、貧しい者が正しいことを申し立てても、偽りを語って身分の低い者を滅ぼす。32:8 しかし、高貴な人は高貴なことを計画し、高貴なことを、いつもする。

この人間の世界では、本来、治めるべき者でない者が治めています。ここでの「痴れ者」とは、「愚か者」と訳すことのできる言葉です。ナバル、であり、まさにサムエル記第一 25 章で、アビガイルの夫のナバルであります。彼が富を持っているので影響力がありましたが、もはやそのような者が高い地位に着くことはありません。今の世にある曲がった状態を、神はまっすぐに正されます。

このことに関連して、パウロがテモテに対して次のように話しました。「1テモテ 5:24-25 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。同じように、良い行ないは、だれの目にも明らかですが、そうでないばあいでも、いつまでも隠れたままではあります。」明らかにされていない罪、また良い行ないがあります。ある罪は明らかにされていますが、ある人々には隠れた罪があって、そのまま放っておか

れています。しかし主は、必ず明らかにしてください。また良い行ないをしていても、人目に隠れていることが数多くあります。それも主は明らかにしてください。

2B 呑気な女 9-20

32:9 のんきな女たちよ。立ち上がって、わたしの声を聞け。うぬぼれている娘たちよ。わたしの言うことに耳を傾けよ。32:10 うぬぼれている女たちよ。一年と少しの日がたつと、あなたがたはわななく。ぶどうの収穫がなくなり、その取り入れもできなくなるからだ。32:11 のんきな女たちよ。おののけ。うぬぼれている女たちよ。わななけ。着物を脱ぎ、裸になり、腰に荒布をまとえ。32:12 胸を打って嘆け。美しい畑、実りの多いぶどうの木のために。32:13 いばらやおどろの生い茂るわたしの民の土地のために。そして、すべての楽しい家々、おごる都のために。32:14 なぜなら、宮殿は見捨てられ、町の騒ぎもさびれ、オフエルと見張りの塔は、いつまでも荒地となり、野ろばの喜ぶ所、羊の群れの牧場となるからだ。

今、5-8 節において、主は、痴れ者について語っておられました。「恥ずべきことを語り、その心は不法をたくらんで、神を敬わず、主に向かって迷いごとを語り、飢えている者を飢えさせ…」というのが、その特徴でした。いかにも悪い奴って感じですね。しかし、ここに描かれているのは、楽にしている、不安になっておらず自信を持っている姿です。これは良いことだと思いますよね、しかし、神の中にいないで保っている平和や安全は、「呑気」であり「自惚れ」であります。「呑気」という言葉は、18 節の「安らかないこの場」と同じ言葉が使われています。元々は「静か」という意味です。そして「自惚れ」は、「平和な住まい」と 18 節で書かれているのと同じ言葉が使われています。元々は、「確信がある、頼りにしている」という意味です。

「私は、そんなに悩みはないわ。そんなに何を騒いでいるのかしら。」という態度ですが、彼女は どうしてそんな自信があるのでしょうか？ 農耕によって、確かに収穫があつて、その保証があるから自信を持っているのです。楽にしている、不安になっていないのですが、それは主から来たものではなく、豊かな農業の収穫によるものなのです。これを「安逸をむさぼる」という表現をしてもよいでしょう。また「高ぶり」と言い換えてもよいでしょう。その態度を神はここで取り扱われているのです。例えば、「私は普通にやっていますから、神のことについては結構です。」というのは、この高ぶりの表れです。そのようなことを言えるのは、他の何かがある確かなものとして拠り頼んでいる殻です。

あるいは、悩んでいる人、困っている人がいるにも関わらず、寄り添う、あるいは向き合うことをせず、「なんでそんなに悩んでいるのかしら？」という態度でいるならば、それは自己中心になっているからに他なりません。マリーアントワネットが言ったとよく言われる言葉で、「ケーキを食べればいいじゃない」がありますね。農民が主食として食べるパンに事欠いていることを知った時に言ったといわれていますが、他者への無関心、自分とその至極近くのことだけに興味を抱いていると、このような的外れな発言が出てきます。今、聞いているユダはそのような心になっていたの、主

はアッシリヤを用いて、目覚めさせようとしているのです。

32:15 しかし、ついには、上から霊が私たちに注がれ、荒野が果樹園となり、果樹園が森とみなされるようになる。32:16 公正は荒野に宿り、義は果樹園に住む。32:17 義は平和をつくり出し、義はとこしえの平穏と信頼をもたらす。32:18 わたしの民は、平和な住まい、安全な家、安らかないこの場に住む。32:19 ..雹が降ってあの森を倒し、あの町は全く卑しめられる。..32:20 ああ、幸いなことよ。すべての水のほとりに種を蒔き、牛とろばとを放し飼いするあなたがたは。

しれ者について、また呑気で自惚れている女について主は語られましたが、「しかし、ついには」と語られています。上からの霊、つまり神の御霊が注がれる時が来るというのです。これからの時代は、自分たちを安心させるものはどんどん取り除かれるようになりますが、しかし神の御霊によってとてつもない平安と喜び、安全を確保できる時代へと変わっていきます。ますます暗き世になっていきますが、聖霊の働きの中でこれまでにない、とてつもない喜びと平安、また確信が与えられるのです。そして、ついに主がこの地上に戻って来られる時に、その御霊の働きは全開して、荒廃したこの地上を果樹園のように変えられるのです。

そして、正義によって治める王がおられ、その義がその地に満ちます。また首長たちが公義でつかさどるので、公正も宿ります。そのおかげで、平和、平穏、信頼をもたらすのです。そして、雹が降って倒される「あの森、あの町」とは、おそらく神の国が建てられる前に残っている町のことでしょう。バビロンかもしれません。黙示録 16 章の最後に、大バビロンへの裁きが書かれていて、「一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。(16:21)」と書かれています。このように、人々を安逸に向かわせ、高ぶらせるバビロンのような町は破壊されるのです。

そして最後に、安心して種を蒔き、家畜を放し飼いにできることが幸いであると言っています。私たちには理解が難しいかもしれませんが、目の前に外敵がいる、荒らし、強奪する者たちがいるなかで、このような状態は福音の何物でもありません。主がそこを治めておられるなら、そこには安心と平穏があるし、そして御霊が降り注がれるなら、平和や秩序を乱す分子は神ご自身が取り除いてくださいます。主との正しい関係の中にいる、そしてその中で他者に対しても接していく、そのような中で、御霊が注がれて、実を結ばせるような状況が出て来ています。主が戻って来られれば、それを世界的に、目で見える形で認めることができますが、今においても、神は私たちにその前触れを起こしたいと願われています。